西俊輔の「毎日楽しく」

Vol.48　2009年8月号

以前何かで読んだ話に、現在の経済至上主義的な社会を皮肉った話がありましたので、ご紹介します。

ある田舎町の海岸でのんびりと釣り糸をたれる貧しそうな人がいました。そこへ通りがかったお金持ちそうな人がその釣り人に「たくさん釣れますか？」と聞きます。すると釣り人は「いや。でも、今日食べる分ぐらいは十分に釣れたよ。」と言います。それを聞いて通りがかりの人は、「釣り糸ではなく、網をしかければもっとたくさん魚がとれますよ。」とアドバイスします。釣り人は「そんなにたくさん魚をとってどうするんだい？」と聞きます。すると通りがかりの人は、「それを売ればお金持ちになれますよ。」と言います。釣り人が「お金持ちになってどうするんだい？」と聞き返すので、通りがかりの人は「お金持ちになって人を雇い、その人たちに漁をさせればあなたは働かなくてすむようになりますよ。」と言います。そこで釣り人はさらに「働かなくてすむようになったら時間があまって暇になるけど、その時間はどうすればいいんだい？」という質問をします。それに対する通りがかりの人の回答が「暇になったらのんびりと釣りでもすればいいじゃないですか」という話です。

初めてこの話を読んだときには、仏教でいう「足るを知る」ことの重要性を再認識して、この話の意図するところがとてもよく理解できました。でも最近、この話にはある重要な前提があることに気づきました。それは、人が一生懸命働くのはそれによってお金持ちになり、自分が楽をしたいと思うためだという前提です。その前提のもとではこの話はまさしく作者（が誰かはわかりません）が意図したとおりの話です。でも、一方でこの話には重要な視点が欠けているように思います。それは、釣りを商売の規模にすることによって、人の雇用機会を創出できるという点です。もしこの釣り人が通りがかりの人のアドバイスどおりに釣りを商売の規模にして多くの人を雇うことができたとしたら、そこに勤めることによって生活を支えられ、助かる人たちがどれほどいるかわかりません。

私は最近、人が一生懸命働くのは自分がお金持ちになって楽をするためでは決してなく、家族やまわりの人たちを幸せにし、社会に貢献するためではないかと考えていますが、みなさんはどう思いますか？